

高大連携活動が高校生に与える影響について

——「都立高校生のための先端研究フォーラム」の事例をもとに——

大野 真理子（九州工業大学），河西 奈保子（東京都立大学），溝口 侑（京都大学大学院）

本研究では、大学教員による講演と大学生からのメッセージにより構成される1回の講演型の高大連携活動において、大学生から語られるメッセージが高校生にどのような影響を与えるかを明らかにするため、参加者アンケートの分析を行った。学年と参加動機との関連性を χ^2 検定によって検討したところ、高校1年生は他学年と比べ「おもしろそうだから」が参加動機である度合いが高く、自発的に参加していることが示された。また、大学生からのメッセージを聞いた印象が「高校での勉強への意欲」「大学進学への意欲」「進路選択の参考」に与える影響を共分散構造分析によって検討したところ、学年により異なる傾向が見られたものの、全学年に共通して「おもしろそうだ」という印象を抱くと、それぞれの意欲等が向上することが示された。

キーワード：高大連携活動，模擬授業，参加動機，学習意欲，高校生の進路選択

1 はじめに

1.1 高大連携活動の意義と効果の検証

文部科学省中央教育審議会（1999）は「初等中等教育と高等教育との接続の改善について（答申）」において、高大連携の取組みの推進を提言した。答申によれば、高大接続の観点は入学者選抜に焦点を当てるだけではなく、高校教育から大学教育への円滑な移行を見据えた教育上の連携が重要であるとし、具体的な取組みとして、大学教員が高等学校等において学問分野の紹介や講義を行う等の例を提示した。

この一例である高校での「模擬授業」について山本（2011）は、キャリア教育の観点から、1コマの模擬授業が高校生にどのような教育的効果を及ぼすかについて検討している。さらに近年では、大学教育再生加速プログラム（AP）テーマⅢ：入試改革・高大接続（2020）が、高大接続を「高等学校関係者と大学関係者との間で互いの教育目標や教育内容、方法について相互理解をはかること等により、高等学校教育と大学教育の連携を強力に進めるもの」と定義しており、高校生の段階から大学での学びを経験することができる様々な取組みを行っている。その結果、入学後の進路選択のミスマッチの防止、大学での学びの基盤形成といった成果をあげている。

このように、高校生を対象とした多様なプログラムが展開されるとともに、その効果検証に関する事例が増えつつある。

1.2 都立高校生のための先端研究フォーラムについて

首都大学東京（現：東京都立大学）では、都立高等

学校、都立中等教育学校及び都立高等学校附属中学校に通う生徒を対象に、最先端の研究成果等の講演を行うことにより、探究学習へのモチベーションを向上させ、大学進学への動機を明確にすることで、大学進学後の生徒自身の在り方・生き方を意識できるようになることを目的として、2017年度より、東京都教育庁との共催で「都立高校生のための先端研究フォーラム（以下、「フォーラム」とする。）」を実施している。

実施時期は、第1回（2017年度実施）が6月上旬、第2回（2018年度実施）及び第3回（2019年度実施）が7月上旬であり、いずれも東京都八王子市にある南大沢キャンパスにおいて開催した。参加者数は、第1回が265名（うち学内教職員31名）、第2回が404名（うち学内教職員27名）、第3回が342名（うち学内教職員22名）であった。

本フォーラムは、大学教員の講演（75分）、大学生からのメッセージ（10分×2～4名）、参加した高校生との質疑応答（20分）で構成される、1回の講演で完結するタイプの高大連携活動である。

大学教員の講演のテーマは、第1回が「化学が挑む『地球環境問題』」、第2回が「実験室で見る宇宙空間の物理と化学」、第3回が「スーパーコンピューティングによる将来の航空機・宇宙機の研究」であり、担当教員が現在取り組んでいる最先端の研究成果について紹介するだけでなく、研究テーマに至った経緯、研究の面白さ、苦労した点などのエピソードを取り入れつつ、高校生に講演を行った。

大学生からのメッセージでは、首都大学東京に在学する都立高校出身の学部生及び講演した教員の研究室

に所属する大学院生によるプレゼンテーションが行われた。学部生は、大学の志望理由、高校時代の勉強の仕方、高校時代の知識・経験のうち大学入学後に役に立ったこと、大学での学びや生活、将来の進路等をテーマとした。大学院生は、大学院の志望理由、高校時代及び学部生時代の知識・経験のうち大学院進学後に役に立ったこと、大学院における授業や研究内容、将来の進路等をテーマとした。

1.3 本研究の目的

これまでの高大連携活動の中心は専門分野を知る機会の提供にあったが、大学生自身が高校生のように何を考え、どのように進路選択をしたのかについて高校生に語りかける取組みの必要性が指摘されている(大滝, 2013)。このような取組みは、高校生の進路選択の手助けになるだけでなく、その実現に向けた主体的な学習態度の向上にもつながる可能性がある。

この点において、本フォーラムが、大学教員からの学問内容に関する講演にとどまらず、在学生からのリアルなメッセージを届ける場としても位置づけられているという点は特徴的であり、意義がある。

そこで本研究では、3 回の実施を終えたフォーラムの効果検証を通じて、1 回で完結する講演型の高大連携活動において、大学生から語られるメッセージが高校生にどのような影響を与えるのかについて、大学生が登壇して自身の経験や考えを発信することの意義に着目しながら検討することを目的とする。

2 方法

2.1 調査対象

各回のフォーラム終了後に、参加者に対してアンケートへの回答を依頼した。回収した 853 件のうち、回答者の学年が不明なもの、中学生や教員等の高校生以外の参加者の回答を除いた 815 件(高校 1 年生: 377 名, 高校 2 年生: 360 名, 高校 3 年生: 78 名)を分析の対象とした。分析には R (3.6.1) を用いた。

2.2 調査項目

2.2.1 デモグラフィック変数

学校名, 学年, 将来の進路希望(4 年制大学, 2 年制短期大学, 専門学校, 就職, その他)について尋ねた。

2.2.2 フォーラムへの参加動機

フォーラムに参加したきっかけについて、「(1) おもしろそうだったから」「(2) ○○(テーマに関連す

る科目名, 第 1 回: 化学, 第 2 回・第 3 回: 物理・化学)に興味があったから」「(3) ○○(テーマに関連するキーワード, 第 1 回: 地球環境問題, 第 2 回: 宇宙, 第 3 回: 航空宇宙)に興味があったから」「(4) 講演内容に興味があったから」「(5) 自分の進路選びに役立ちそうだったから」「(6) 学校に勧められたから」「(7) 首都大学東京に興味があったから」の 7 項目に対し、該当する項目すべてを選択してもらった。

2.2.3 大学生からのメッセージに対する印象

大学生からのメッセージを聞いて受けた印象について、「(1) おもしろそうだ」「(2) つまらなそうだ」「(3) 充実している」「(4) 充実していない」「(5) 大学での学びは高校での学びと異なる」「(6) 大学での学びは高校での学びとあまり変わらない」「(7) 大学での学びは社会に出て役に立つ」「(8) 大学での学びは社会では役に立たない」「(9) 大学生になりたい」「(10) 大学生にはなりたくない」の 10 項目に対し、該当する項目すべてを選択してもらった。

これら 10 項目のうち、偶数番号のネガティブな印象を選択した回答が少なかったことから、奇数番号のポジティブな印象を選択した回答を分析対象とした。

2.2.4 高校での勉強への意欲, 大学進学への意欲, 進路選択の参考

大学生からのメッセージを聞いて、高等学校での勉強への意欲(以下、「高校での勉強への意欲」とする。)が高まったかどうかについて、「(1) 非常に高まった」「(2) 高まった」「(3) あまり高まらなかった」「(4) 全く高まらなかった」の四件法で回答してもらった。

また、フォーラムに参加したことで、大学進学への意欲(以下、「大学進学への意欲」とする。)が高まったかどうかについて、「(1) 非常に高まった」「(2) 高まった」「(3) あまり高まらなかった」「(4) 全く高まらなかった」の四件法で回答してもらった。

さらに、フォーラムが進路選択の参考になったかどうか(以下、「進路選択の参考」とする。)について、「(1) 非常に参考になった」「(2) 参考になった」「(3) あまり参考にならなかった」「(4) 全く参考にならなかった」の四件法で回答してもらった。

3 結果

3.1 学年とフォーラムへの参加動機との関連性

学年とフォーラムへの参加動機との関連性を、 χ^2

検定によって検討した。その結果、「おもしろそうだったから」と「学校に勧められたから」の項目で有意な関連が見られた（「おもしろそうだったから」 $\chi^2 = 11.593, df = 2, p < .001$ ；「学校に勧められたから」 $\chi^2 = 6.415, df = 2, p < .05$ ）。残差分析の結果、参加動機として「おもしろそうだったから」を選択した度合いは高校2年生が有意に低く、高校1年生が有意に高かった（表1）。

また、参加動機として「学校に勧められたから」を選択した度合いは高校3年生が有意に低かった。さらに、高校2年生が「学校に勧められたから」を選択した度合いの高さは有意ではなかったものの、有意傾向にあった（表2）。

表1 学年と参加動機「おもしろそうだったから」

学年	おもしろそうだったから			合計
		はい	いいえ	
高校1年生	度数	209	168	377
	%	55.4	44.6	100.0
	調整済み残差	3.368 **	-3.368 **	
高校2年生	度数	155	205	360
	%	43.1	56.9	100.0
	調整済み残差	-3.060 **	3.060 **	
高校3年生	度数	36	42	78
	%	46.2	53.8	100.0
	調整済み残差	-0.544	0.544	
合計	度数	400	415	815
	%	49.1	50.9	100.0

注) ** $p < .01, * p < .05$

表2 学年と参加動機「学校に勧められたから」

学年	学校に勧められたから			合計
		はい	いいえ	
高校1年生	度数	126	251	377
	%	33.4	66.6	100.0
	調整済み残差	-0.521	0.521	
高校2年生	度数	136	224	360
	%	37.8	62.2	100.0
	調整済み残差	1.830 +	-1.830 +	
高校3年生	度数	18	60	78
	%	23.1	76.9	100.0
	調整済み残差	-2.206 *	2.206 *	
合計	度数	280	535	815
	%	34.4	65.6	100.0

注) ** $p < .01, * p < .05, + p < .10$

3.2 メッセージ印象と意欲等の高まりとの関連性

大学生からのメッセージを聞いて受けた印象が、「高校での勉強への意欲」「大学進学への意欲」「進路選択の参考」に与える影響を共分散構造分析によって検討した。

メッセージ印象（「おもしろそうだ」「充実してい

る」「大学での学びは高校での学びと異なる」「大学での学びは社会に出て役に立つ」「大学生になりたい」）に加えて参加動機のうち「自分の進路選びに役立ちそうだったから」をあわせて独立変数として投入し、フォーラム参加前の進路選択に対する意識の高さを統制することとした。「高校での勉強への意欲」「大学進学への意欲」「進路選択の参考」を従属変数として、独立変数間および従属変数間に共分散を仮定し分析を行った。また全学年での分析に加え、学年ごとの分析も行った。

モデル全体の評価には χ^2 値、GFI、AGFI、RMSEA、AIC を用いた。二値変数を含むため、ロバスト最尤法による母数の推定を行った。

3.2.1 参加した高校生全体の傾向

全学年では、「充実している」から「大学進学への意欲」，「大学生になりたい」から「高校での勉強への意欲」と「進路選択の参考」に対するパス係数は有意でなかった。また「大学での学びは高校での学びと異なる」からのパス係数はすべて有意ではなかった。そこで「大学での学びは高校での学びと異なる」と有意でなかったパスを削除し、再度分析を行った。その結果、適合度は $\chi^2(3) = 3.41 (n.s.)$ ，GFI = .997，AGFI = .968，RMSEA = .013，AIC = 3549.43 であった。GFI、AGFI は1に近いほど、RMSEA は0に近いほど、AIC は小さいほどモデルの説明率が高く、良いモデルであると判断される。また RMSEA は0.05 以下であれば適合度が高いと判断される。一方0.10 以上であれば適合度は低いとされ、モデルは採用しない（豊田，1998）。これらの基準に照らし合わせて本モデルの適合度は十分高いと判断された。最終的に採用したモデルを図1に示す。

「高校での勉強への意欲」に対しては、「自分の進路選びに役立ちそうだったから」「おもしろそうだ」「充実している」「大学での学びは社会に出て役に立つ」からの有意な影響が見られた（順に $\beta = .08, .21, .08, .09; p < .05, .01, .05, .01$ ）。「大学進学への意欲」に対しては、「自分の進路選びに役立ちそうだったから」「おもしろそうだ」「大学での学びは社会に出て役に立つ」「大学生になりたい」からの有意な影響が見られた（順に $\beta = .10, .22, .10, .10$ ；いずれも $p < .01$ ）。「進路選択の参考」に対しては、「自分の進路選びに役立ちそうだったから」「おもしろそうだ」「充実している」「大学での学びは社会に出て役に立つ」からの有意な影響が見られた（順に $\beta = .11, .23, .07, .11; p < .01, .01, .05, .01$ ）。

それぞれの決定係数 (R^2) の値は「高校での勉強への意欲」「大学進学への意欲」「進路選択の参考」で .08, .11, .10 であった。

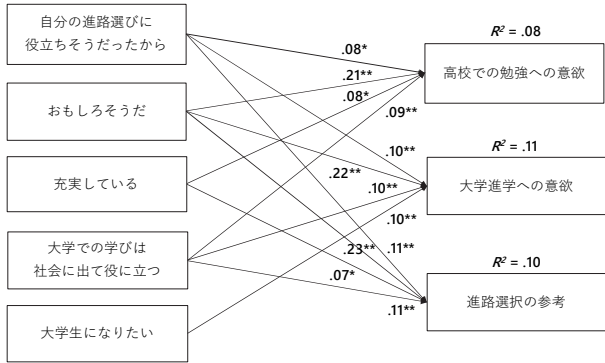


図 1 メッセージ印象と意欲等の高まり (全学年)

注) ** $p < .01$, * $p < .05$

数値は標準化係数である。

誤差及び独立変数間, 従属変数間の共分散は紙面の関係上省略した。

3.2.2 高校 1 年生の傾向

1 年生では、「大学生になりたい」から「高校での勉強への意欲」と「進路選択の参考」に対するパス係数は有意でなかった。また「自分の進路選びに役立ちそうだったから」「充実している」「大学での学びは高校での学びと異なる」からのパス係数はすべて有意ではなかった。そこで「自分の進路選びに役立ちそうだったから」「充実している」「大学での学びは高校での学びと異なる」と有意でなかったパスを削除し、再度分析を行った。その結果、適合度は $\chi^2(2) = 1.92$ (*n.s.*), GFI = .997, AGFI = .966, RMSEA = .000, AIC = 1586.00 であり、本モデルの適合度は十分高いと判断された。最終的に採用したモデルを図 2 に示す。

「高校での勉強への意欲」に対しては、「おもしろそうだ」「大学での学びは社会に出て役に立つ」からの有意な影響が見られた (順に $\beta = .30, .13$; いずれも $p < .01$)。「大学進学への意欲」に対しては、「おもしろそうだ」「大学での学びは社会に出て役に立つ」「大学生になりたい」からの有意な影響が見られた (順に $\beta = .26, .13, .13$; いずれも $p < .01$)。「進路選択の参考」に対しては、「おもしろそうだ」「大学での学びは社会に出て役に立つ」からの有意な影響が見られた (順に $\beta = .20, .19$; いずれも $p < .01$)。

それぞれの決定係数 (R^2) の値は「高校での勉強への意欲」「大学進学への意欲」「進路選択の参考」で .12, .14, .09 であった。

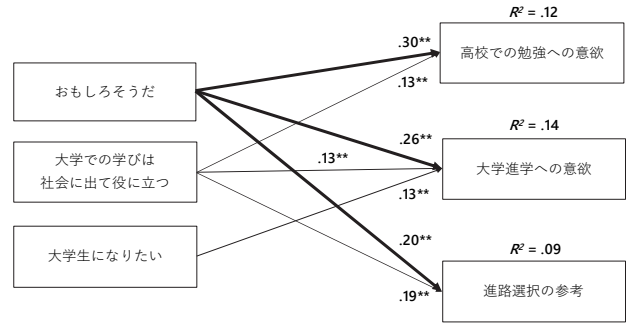


図 2 メッセージ印象と意欲等の高まり (高校 1 年生)

注) ** $p < .01$, * $p < .05$

数値は標準化係数である。

誤差及び独立変数間, 従属変数間の共分散は紙面の関係上省略した。

太線は 3 学年で共通しているパスを表す。

3.2.3 高校 2 年生の傾向

2 年生では、「充実している」「大学での学びは高校での学びと異なる」「大学での学びは社会に出て役に立つ」「大学生になりたい」からのパス係数はすべて有意ではなかった。そこで、それらの変数を削除したところ、独立変数から従属変数へすべてのパスがひかれたモデルとなった (図 3)。

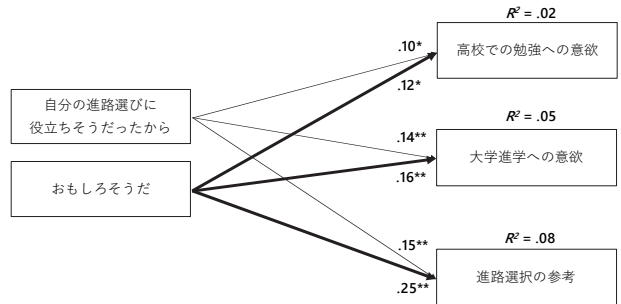


図 3 メッセージ印象と意欲等の高まり (高校 2 年生)

注) ** $p < .01$, * $p < .05$

数値は標準化係数である。

誤差及び独立変数間, 従属変数間の共分散は紙面の関係上省略した。

太線は 3 学年で共通しているパスを表す。

「高校での勉強への意欲」に対しては、「自分の進路選びに役立ちそうだったから」「おもしろそうだ」からの有意な影響が見られた (順に $\beta = .10, .12$; いずれも $p < .05$)。「大学進学への意欲」に対しては、「自分の進路選びに役立ちそうだったから」「おもしろそうだ」からの有意な影響が見られた (順に $\beta = .14, .16$; いずれも $p < .01$)。「進路選択の参考」に対しては、「自分の進路選びに役立ちそうだったから」「おもしろそうだ」からの有意な影響が見られた

(順に $\beta = .15, .25$; いずれも $p < .01$)。

それぞれの決定係数 (R^2) の値は「高校での勉強への意欲」「大学進学への意欲」「進路選択の参考」で $.02, .05, .08$ であった。

3.2.4 高校3年生の傾向

3年生では、「自分の進路選びに役立ちそうだったから」「大学での学びは高校での学びと異なる」「大学での学びは社会に出て役に立つ」「大学生になりたい」からのパス係数はすべて有意ではなかった。そこで、それらの変数を削除したところ、独立変数から従属変数へすべてのパスがひかれたモデルとなった(図4)。

「高校での勉強への意欲」に対しては、「おもしろそうだ」「充実している」からの有意な影響が見られた(順に $\beta = .25, .41$; $p < .05, .01$)。「大学進学への意欲」に対しては、「おもしろそうだ」「充実している」からの有意な影響が見られた(順に $\beta = .36, .33$; いずれも $p < .01$)。「進路選択の参考」に対しては、「おもしろそうだ」「充実している」からの有意な影響が見られた(順に $\beta = .25, .37$; $p < .05, .01$)。

それぞれの決定係数 (R^2) の値は「高校での勉強への意欲」「大学進学への意欲」「進路選択の参考」で $.26, .28, .22$ であった。

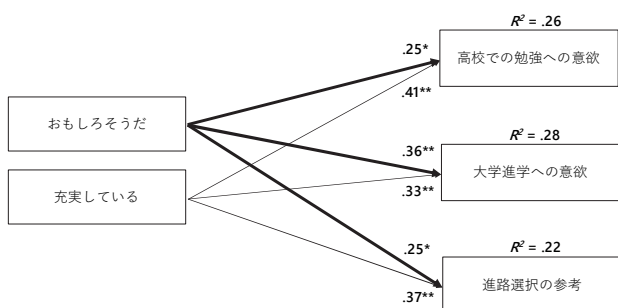


図4 メッセージ印象と意欲等の高まり(高校3年生)

注) ** $p < .01$, * $p < .05$

数値は標準化係数である。

誤差及び独立変数間、従属変数間の共分散は紙面の関係上省略した。

太線は3学年で共通しているパスを表す。

4 考察

4.1 学年とフォーラムへの参加動機との関連性

高校1年生は他学年と比べ「おもしろそうだったから」が参加動機である度合いが有意に高いことから、内発的動機づけに基づき、自発的にフォーラムに参加している生徒の割合が高い傾向にあると考えられる。

一方、高校2年生は他学年と比べ「おもしろそう

だったから」が参加動機である度合いは有意に低かった。この理由として考えられることは、高校2年生が学校の行事の一環としてフォーラムに参加している場合が多いということである。参加動機として「学校に勧められたから」を選択した度合いの高さが有意傾向にあることから、自発的に参加している生徒の割合は他学年と比べて低い傾向にあることが推測される。

また、高校3年生は他学年と比べ「学校に勧められたから」が参加動機である度合いが有意に低く、自らの意思で参加を希望した生徒が集まっている傾向にあると考えられる。

4.2 メッセージ印象と意欲等の高まりとの関連性

4.2.1 フォーラムが高校生に与える影響力

決定係数 (R^2) の値は、高校3年生、高校1年生、高校2年生の順に高かった。特に、高校3年生の値は中程度の効果量を示しており、その理由は4.3で検討する。高校1年生及び高校2年生の値からは、フォーラムが与える影響力が大きいとまでは言えないものの、フォーラムが1回で完結する講演型の高大連携活動であることを考慮すれば、1回の参加で高校生に与える影響力としては、一定の効果があったものと解釈できる。

4.2.2 学年別の傾向

高校1年生では、大学生のメッセージから「おもしろそうだ」「大学での学びは社会に出て役に立つ」という印象を受けると「高校での勉強への意欲」「進路選択の参考」が向上し、「おもしろそうだ」「大学での学びは社会に出て役に立つ」「大学生になりたい」という印象を受けると「大学進学への意欲」が向上することが示された。高校1年生の場合、フォーラム実施時期の夏は、高校での新しい生活に適應することに重きが置かれており、まだ高校卒業後の進路に対する意識は高くなく、大学進学に対する具体的なイメージを持っていない時期であると推測される。よって、フォーラムを通じて大学での学びがどのようなものか、大学生とはどのような存在なのかを知り、大学で学ぶことのおもしろさに気づくことで大学進学への関心が高まり、進路候補のひとつとして捉えられるようになる。また、大学での学びの基盤となる高校での勉強への意欲も喚起され、フォーラムが大学での学びに興味を持つきっかけとしての役割を果たしているものと考えられる。

高校2年生では、「自分の進路選びに役立ちそうだったから」という参加動機を持つことと、大学生の

メッセージから「おもしろそうだ」という印象を受けると「高校での勉強への意欲」「大学進学への意欲」「進路選択の参考」が向上することが示された。高校 2 年生の場合、フォーラム実施時期の夏は、進路について本格的に検討を始め、大学進学を見据えた学部・学科の選択に向けて動き出す時期であると推測されるが、生徒によっては検討の段階に至らないなど、進路選択への関心の差が大きい学年でもある。また、4.1 で示したように、学校行事として参加「させられた」と捉える生徒が多い傾向にあることから、フォーラムの目的のひとつである大学進学への意欲の向上のためには、進路選択のためという参加動機を持っていない生徒にも役立ったと感じてもらうために、フォーラムの趣旨をあらかじめ伝える場を設けるなど、開催当日以外でのフォローを工夫することが必要と考えられる。

高校 3 年生では、大学生のメッセージから「おもしろそうだ」「充実している」という印象を受けると「高校での勉強への意欲」「大学進学への意欲」「進路選択の参考」が向上することが示された。高校 3 年生の場合、フォーラム実施時期の夏は、ある程度進路希望が決まっている状態であり、その実現に向けて勉強に取り組んでいる時期であると推測される。よって、フォーラムを通じて充実した大学生活を送る自分の姿を想像し、期待を高めることが進学への意欲を一層強め、ひいては受験に向けて高校での勉強への意欲の向上にもつながる。さらには、大学進学という進路選択をすることの意義を再確認できるものと考えられる。なお、登壇する学生の専攻は、高校生の進学希望先と同じであるとは限らないが、進学への強い意識が醸成されている場合、分野を超えて大学での学びそのものに対するモチベーションを高めた可能性がある。

上述のように学年により異なる傾向が見られたものの、全学年に共通して「おもしろそうだ」という印象を受けると「高校での勉強への意欲」「大学進学への意欲」「進路選択の参考」が向上することが示された。

4.3 総合考察

4.1 の学年別参加動機と 4.2 の決定係数 (R^2) の値をあわせて検討すると、自らの意思で自発的に参加した傾向が高い高校 3 年生や高校 1 年生のほうが、そうではない高校 2 年生よりもフォーラムの影響力が大きかったことから、自らの意思で参加するということが高大連携活動の影響力を高めると考えられる。また、大学生からのメッセージから受けた印象のうち、何が「高校での勉強への意欲」「大学進学への意欲」「進路選択の参考」の向上に影響するかは、学年ごと

に異なる傾向を示したことから、学年によって高大連携活動に求めるものが異なるということが考えられる。

よって、高大連携活動を企画・実施する際は、参加者が自ら参加したいと思える内容を提案するという観点と、参加する学年のニーズに合わせたプログラムを企画するという観点が重要であることが示唆された。

5 おわりに

5.1 本研究を踏まえた高大連携活動の展望

一般的に高大連携活動として広く認識されているものは、大学教員による高校への出張講義（『出前授業』と大学が遜って表現することもある）であろう。高校ごとにキャンパス見学や大学施設見学を行う大学も多い。いずれも高校等からの依頼に基づいて実施されるものを高大連携活動とし、大学での学びを高校生に提供することが円滑な高大接続を促し、高校生にとって有意義であると仮定して大学が応じているのが現状である。

東京都立大学では 2010 年に高大連携室を開室した当初より、高校と大学が連携して高校生の「自ら学ぶ力」を育成し、充実した大学生活をスタートするよう支えることを目標としている。その活動として、大学見学講座・大学教員による模擬講義（出張講義を含む）・大学施設見学（いずれも高校等からの依頼に基づく実施）のほか、東京都との連携による理系分野の研究体験プログラム等を開催している。さらに、最近では、探究学習支援への要望も増加している。

これまで多くの場合、東京都立大学へ関心がある、あるいは模擬講義の内容に興味がある高校生等がそれぞれのイベントに参加していたように見受けられた。しかし、最近の傾向としては、興味の有無によらず授業の一環として実施される大学見学、複数の講義から一つを選択しなくてはいけない模擬講義、といった高校生の関心や希望を考慮しない行事や、実施が目的の行事が増加し、生徒に感動や希望を与えていないように思われる。この傾向を筆者らは指摘する。大学内でもこのような行事に協力することに疑問の声があがっている。

本研究を受け、高大連携活動を高校生の「高校での勉強への意欲」「大学進学の意欲」「進路選択の参考」の向上を目的にする場合には、実施内容は以下の 3 点に十分考慮する必要があるだろう。①高校生が興味・関心を持ち、自ら選択したプログラムへ参加すること、②高校生が自らの興味・関心を喚起するプログラムを提供すること（例えば、同窓生である卒業生が「大学生活はおもしろそうだ」と印象づけることは効

果的であろう)、③大学での学びが社会に出て役に立つことが分かるよう、模擬授業では社会との関わりを重視した内容にすること、である。

特に進路選択を間近に控えた高学年の場合は、高大連携活動を主催する大学そのものや、取り上げられている専門分野への進学を志望していないなど、様々な状況の高校生が参加していることを想定しておくべきである。そのような参加者であっても「おもしろそう」と感じられる企画を提供することが重要であり、大学生に向けた大学の一部の専門分野に関する講義を提供するだけでは効果が得にくい可能性がある。

一方、大学生が大学生活のおもしろさだけでなく、高校時代にやっておけばよかったことを話すことで、高校での日々の学びの積み重ねの重要性を伝えることも必要であろう。

この、日々の学びの重要性と、進路意識や興味・関心への意識付けについては、大学側が高大連携活動の際に提供するだけでは一過的な刺激に限られてしまう。それゆえ、高大連携活動の成果をより一層高めるためには、その一環として、高校での日常的な指導が重要な役割を果たすと考えられる。高校での日常的な働きかけについては、高校生の置かれた状況を最もよく理解している高校教員が行うことが望ましく、高大連携活動での経験で得た意識付けを再認識するような指導が期待される。そのためには、高校と大学が一体となって、大学受験のその先を見据えた高校生の成長を促し見守るといった双方の態度が必要である。すなわち、大学側は高校の置かれた立場を理解し、高校生の成長具合に応じたプログラムを提供することが求められる。また、高校側は折に触れ大学での学びに接し、社会が求めることにアンテナを張ることが必要であろう。

必要な情報はインターネットを用いれば十分得られる中で、これからの高大連携活動に必要なもののひとつは、高校生が興味・関心を持てる分野を見つけられるよう支援することであろう。このことを高校と大学の双方が理解し、高校生に働きかける必要がある。

5.2 今後の課題

本研究は首都大学東京で開催したフォーラムの参加者を分析対象としているため、結果の一般化可能性については限界がある。また、各回では講演テーマ、登壇する教員及び大学生、参加する高校生の集団が異なるものの今回の分析ではその違いを考慮していない。今後は、プログラム内容や参加者集団を考慮した検討をすることも必要であると考えられる。特に、参加者の学力レベルによっては、かえって意欲等が低下する

可能性も懸念されることから、学力レベルに着目した分析を行うことには意義があろう。

さらに、新型コロナウイルス感染症の拡大に伴い、2020年度に実施予定であった第4回のフォーラムが中止となったことを受け、今後の高大連携活動のあり方そのものについても検討すべき段階にあると考える。2021年度以降も、対面での企画の実施が困難であることが想定される。このことが高校生の進路選択にどのような影響を与えるのか、また、代替手段として重視されているオンラインによる企画について、オンラインだからこそできること、あるいはできないことは何か、引き続き検討する必要がある。

謝辞

フォーラムの実施にあたり、参加者の募集から当日の運営まで東京都教育庁の皆様にご多大なご支援・ご協力をいただきました。ここに厚く御礼申し上げます。また本研究の一部は東京都立大学学長裁量枠(社会連携研究支援)より助成を受けました。

参考文献

- 大学教育再生加速プログラム (AP) テーマⅢ：入試改革・高大接続 (2020). 「事業の目的」大学教育再生加速プログラム (AP) テーマⅢ：入試改革・高大接続
<http://ap-theme3.com/intro> (2020年3月14日).
- 文部科学省中央教育審議会 (1999). 「初等中等教育と高等教育との接続の改善について (答申)」文部科学省
https://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chuuou/toushin/991201.htm (2020年3月14日).
- 大滝夏美 (2013). 「高校生の進路選択に関する志向性と今後の高大連携施策のあり方について」『立命館高等教育研究』**13**, 15-30.
- 豊田秀樹 (1998). 『共分散構造分析 [入門編] : 構造方程式モデリング』朝倉書店.
- 山本奨 (2011). 「キャリア教育の視点による高校生対象大学模擬授業改善の試み—Hollandの職業選択理論を利用した授業プログラム—」『岩手大学教育学部研究年報』**70**, 119-135.